

ハンガリーにおける古代学の展開と宗教性の関係をめぐる研究¹

はじめに

日本で西洋古典学の研究・教育に携わる者にとって、対象となるギリシア・ラテン文献と、自らの置かれた位置との距離の大きさを痛切に感じない者はまずない。日本語とは言語の構造が根本的に異なるばかりでなく、伝承の過程・経緯を考える場合にも、きわめて大きな隔たりが存在する。西洋古典を人類に普遍的な「必須の教養」と位置づけることはたやすいが、欧米のカリキュラムにおいてすら、これら古典語が必修科目から外される傾向にある現在、わが国にあってはなおのこと、西洋古典とそれに連なる諸文化を真に意義づける試みは絶えず行われて然るべきであろう。このような意識のもとに立案したのが今回の企画であった。

ハンガリーは、中欧に位置しながらもアジア系の言語文化をよく保持して今日に至り、ハンガリー語は日本語との間に多くの構造的な共通性を持つ。その一方で、紀元後 1000 年の初代聖イシュトヴァーンによる王制樹立以来、国家を統一する基盤としてカトリック教会の諸制度・教理を受容し、それは変貌を伴いつつも、ほぼ受け継がれて今日に至っている。その影響の下、国内西部を中心にローマおよび中世西欧文化の伝承が数多く遺されているが、対照的に北東部では、ビザンツ文化の遺産も健在である。このように、ローマ・ビザンツ双方の伝承を継承しつつ、初代国王の威光のもと、国内に宗教的な統一を維持しているという点は、ハンガリーの独自性として指摘しうる点であろう。

今回のプロジェクトにおいて、研究のための主たる拠点としたのは、国内東北部の中心都市ニレジハーザの聖アタナース研究学院である。ニレジハーザ市は、ハンガリー・ギリシア=カトリック教会ハイドゥードログ司教区の中心的位置を占める事実上の司教座都市である。ギリシア=カトリック教会とは、ビザンツの典礼様式と東方教会法を護持しつつローマ教皇の首位権を認めるカトリック教会の一組織であり、旧オーストリア・ハンガリー帝国の版図にあたる中・東欧域に根強い勢力を持つ。アタナース研究学院は、ギリシア・カトリック教会内の中核的研究所として、ローマにある教皇庁立東方研究学院（Pontificio Istituto Orientale；略称 PIO）と 1995 年以来姉妹校提携を結び、典礼学・教父学・ビザンツ学・東方教会法学などの分野で国際的に活躍する教授陣を擁し、その水準はきわめて高い。

筆者は、現代世界におけるビザンツ文化の継承者として、また一致と普遍性を尊重しつつ固有の文化遺産を保持する伝承の担い手として、早くから、特にハンガリーの「ギリシア=カトリック教会」に注目してきた。アジア系の言語文化を保持しつつ、ビザンツ文化を継承しかつローマと一致する、という姿勢には、今日考えられうる限りで最も多面的かつ柔軟な文化受容のあり方の一つが具現されていると考えられようからである。

日程は、2005 年 8 月 1 日に渡欧、同日夕刻にハンガリー入りして以降、2006 年 1 月 7 日にハンガリーを発ち、翌 1 月 8 日に成田に帰国するまでの総計 161 日（ハンガリー国内 160 日）に及んだ。以下に主な活動と滞在地を略記する。付した番号は本文説明部の番号と一致する。まず 8 月初頭より首都ブダペシュトにて 1 週間ほど準備期間を過ごした後、¹ デブレツェン大学にて 2 週間に及ぶハンガリー語の実践的研修。その後、スロヴァキアと

¹ 本稿は、「2005 年度 筑波大学国際連携プロジェクト（長期派遣）報告書「ハンガリーにおける古代学の展開と宗教性の関係をめぐる研究」」として、2006 年 1 月、筑波大学国際連携室の HP に掲載されたものの再録である。

の国境に近いダーモーツ村のビザンツ典礼学研究所（6．参照）にて数日を過ごし，月末からは2．ペーチ大学で開催された国際オリゲネス学会に出席した．3．9月上旬以降は，1月初旬の帰国まで，ほぼニーレジハーザ市の聖アタナズ研究学院にてビザンツ学・教父学・典礼学の研究に励んだ．4．この間，同研究学院併設のセミナリウムに滞在し，司教座聖堂とセミナリウムで行われるビザンツ典礼に参加して，典礼の実際を知る機会を得た．5．10月初旬と11月下旬には，ニーレジハーザに近い巡礼地マーリアポーチにて国際学会が開催され，これに出席したほか，秋休み期間には，ハンガリー各地に点在する司教座都市を巡った．さらに6．12月中旬には，ブダペシュトにて開催されたハンガリー教父学協会書評会に出席した．なおハンガリーでは，国内交通網が首都ブダペシュトを中心に放射状に展開しているため，地方都市間の移動の際にはブダペシュト経由が不可欠となり，日程上，ブダペシュト滞在に要した期間も少なくない．その際には，ブダ城内の国立セイチェーニ図書館を利用することが多かった．

では，今回の在外研究により得られた主要な成果に関して，順に説明を加えることにする．

1．デブレツェン大学（ハンガリー語研修）

8/7（日）より8/20（土）までデブレツェンに滞在し，デブレツェン大学にてハンガリー語の語学研修に励んだ．デブレツェンはブダペシュトに次ぐ国内第2の都市，ハンガリー東部の経済的・文化的中心地である．デブレツェン大学で夏季を中心に開講されているハンガリー語集中コースは，1927年創設という長い伝統を誇り，国際的に高い評価を得ている．筆者は，そのうち「中級コース」に該当する2週間のクラスを昨年に続き受講し，最終試験を通過して，ハンガリー語中級資格を「優」判定にて取得した．併設クラスとして開設された同大学の教授陣による特別講義にも参加し，彼らとの交流を深めることもできた．



ハンガリー語は，いまだわが国の外国語教育に浸透しているとは言えないが，ヨーロッパ語の中では珍しくアジア系の起源を持つ．他の欧米語とは構造的に著しく異なり，むしろ語順あるいは助詞的機能を持つ格変化などの観点からすれば，日本語と共通する側面を多く有する．その一方でヨーロッパ語と常に接触を繰り返してきた経緯から，独・伊・英・仏・露語などとの間には，語彙レベルでほぼ一対一の対応が成立し，「ハン 欧語」辞典の類も充実している．アジア系言語が欧米語と接触する際の，規範的なパターンを形成しているともいえよう．したがって日本人にとっては，とくに西欧語での意思表示を必要とする場合，まずハンガリー語の表現を想定し，それを他のヨーロッパ語に置き直すという方法は，一見迂遠に思えるが，実は欧米諸国語に対して多面的に視野を開く行程ともなる．西洋古典学など，ヨーロッパ諸国語の運用能力を必要とする分野の場合，そのプロセスをいかに確立するかという問題は，筆者にとって積年の課題であった．このハンガリー語能力の陶冶は，今回の在外研究における準備段階ではあったが，計半年間での総合的なハンガリー語力の上達をも含めるならば，資格取得という実質的成果だけでなく，きわめて大きな基礎的効果を挙げ得たものと考えられる．

なおこのデブレツェン滞在中に，それ以前のブダペシュト滞在期の記録をもあわせ，まとめた短報が筑波大学附属図書館報『つくばね』に掲載されている．「「コルヴィナ文庫」から聖イシュトヴァーンへーハンガリーの歴史を遡る旅ー」，筑波大学附属図書館報『つく

ばね』vol.31,no.2(通巻 118 号),p.1-2,2005.9 を参照。これは改変を伴って本章後述「補説 2」に再録された。

2. 国際オリゲネス学会 (ペーチ大学)

8月29日から9月2日までは、ハンガリー西南部の中心都市ペーチにて開催された「第9回国際オリゲネス学会」に出席した。オリゲネスは紀元後3世紀前半に活躍したギリシア教父であるが、後世の公会議において異端と断罪されるなど、様々な事情があいまって、西欧中心の教父学・神学・古典学の展開からはやや外れた位置に置かれてきた。20世紀後半に至ってオリゲネス再評価の機運が一気に高まり、今日では西方のアウグスティヌスに比肩しうる東方の代表的教父と見なされることも多い。また同学会は、ギリシア教父学研究者たちが、個々の専門を越えて一堂に会する場としての意味をも併せ持つため、今回の学会参加は欧米諸国の代表的な教父学者たちとの交流を深める格好の機会となった。この学会の主催者を務めたのは、ペーチ大学のショモシュ・ローベルト教授とハイドル・ジョルジュ教授であり、特にこの二人とは、今回の滞在期間を通して、大いに親交を深めることができた。



今年度の大会で、筆者には研究報告を発表する機会はなかったが、この大会参加により、欧米各国の教父学者たちによる研究発表の実際に触れることができ、次回4年後の夏、ポーランド・クラクフでの発表を目指す意味で、非常に効果的な準備期間となった。次回の共通テーマは Origen as a writer である。今回特に印象的だったのは、イタリアからの参加者が多く目立ち、また大会に参加する欧州の研究者たちが、英・独・仏・伊語に関して、ほぼ完璧な専門的コミュニケーション能力を備えているという点である。これは、英語教育に突出し、また伊語教育の遅れた日本の外国語教育にとっては、大いに参考にすべき現実であろう。大会期間中、ポローニャ大学の L.ペッローネ教授より、伊国の学術誌のために、日本の研究状況に関する情報提供の依頼があった。また同じくイタリア人の G.ジェンナーロ神父は、筆者との名刺交換の際、日本で公刊している欧文学会誌『パトリステイカ』の拙稿題目を瞬時に挙げ、欧文発表による情報伝達力に驚嘆した次第でもある。

なお上述のショモシュ・ローベルト教授と親交を深めたことがきっかけとなり、ハンガリー語で記された教授の著『アレクサンドリアの神学』を、日本の中世哲学会学会誌上で書評する機会を得た(『中世思想研究』第48号,2006年9月刊行予定)。また下記6.で述べるハンガリー教父学協会の事務局長で、デブレツェン大学のブガール・イシュトヴァーン教授ともこの会場にて親交を得ることができた。

今年度の大会で、筆者には研究報告を発表する機会はなかったが、この大会参加により、欧米各国の教父学者たちによる研究発表の実際に触れることができ、次回4年後の夏、ポーランド・クラクフでの発表を目指す意味で、非常に効果的な準備期間となった。次回の共通テーマは Origen as a writer である。今回特に印象的だったのは、イタリアからの参加者が多く目立ち、また大会に参加する欧州の研究者たちが、英・独・仏・伊語に関して、ほぼ完璧な専門的コミュニケーション能力を備えているという点である。これは、英語教育に突出し、また伊語教育の遅れた日本の外国語教育にとっては、大いに参考にすべき現実であろう。大会期間中、ポローニャ大学の L.ペッローネ教授より、伊国の学術誌のために、日本の研究状況に関する情報提供の依頼があった。また同じくイタリア人の G.ジェンナーロ神父は、筆者との名刺交換の際、日本で公刊している欧文学会誌『パトリステイカ』の拙稿題目を瞬時に挙げ、欧文発表による情報伝達力に驚嘆した次第でもある。

3. ニーレジハーザ(1) 聖アタナース研究学院

9月11日より2006年1月6日まで、今回の在外研究期間中7割以上を過ごしたのが、東北部の中心都市ニーレジハーザである。冒頭にも記したとおり、同市にはハンガリーのギリシア・カトリック教会の司教座聖堂をはじめ、セミナリウム、研究学院、司教館などが中心部に隣接して位置し、言わば複合施設の様相を呈している。筆者は西洋古典学の中でも



ギリシア教父学・ビザンツ学を専門領域の一つとしており、かねてよりビザンツ典礼の体験を不可欠なものと認識していた。そのため、典礼をはじめとする諸々のビザンティン伝承文化を実地に体験する上で、同地区は理想的な環境であった。以下、このニーレジハーザでの成果を(1)アタナーズ研究院 および(2)司教座教会・セミナリウム関連に分けて記すことにする。

今回の在外研究に際し、受け入れ機関として大いにご尽力たまわったのが、聖アタナーズ研究院のプレゲン・イシュトヴァーン院長(教義学)およびイヴァンチョー・イシュトヴァーン教授(典礼学)のお二人である。まずプレゲン教授は、ハンガリーのギリシア・カトリック教会ケレステス・スィラールト現司教の司教代理をも務め、多忙を極める。またイヴァンチョー教授は、2003年以降ローマ教皇庁国際神学委員会委員をも務める国際的な典礼神学者である。同学院はローマ教皇庁より大学認可を獲得し、1995年以降ローマの教皇庁立東方学院と提携校の関係にあるが、イヴァンチョー博士はこの提携の調整役を務める一方、ハイレベルで知られる同学院の紀要 *Athanasiana* (年2回刊行)の責任編集者としても多忙である。学院ではこのお二人の講義を中心に受講し、ビザンツの典礼学および神学の知見を深めることができた。

滞在期間中、イヴァンチョー教授の依頼により、10月27日に学院大講堂にてハンガリー語による講演をおこなうことになった(“Görög Patrológia Jelentősége és Lehetősége Japánban—önéletrajzi emlékirat—”「日本におけるギリシア教父学の意義と可能性—これまでの歩みを省みて—」)。この講演の内容は、イヴァンチョー博士をはじめ多くの人々から高い評価をもって迎えられ、上掲の紀要 *Athanasiana* の次号に掲載されることになった(“Görög Patrológia Jelentősége és Lehetősége Japánban—önéletrajzi emlékirat—”, *Athanasiana* 22, 91-107(engl.res.148-150), Szent Atanáz Görög Katolikus Hittudományi Főiskola, Nyregyháza 2006)。これは、今回の在外研究期間中の成果として挙げうる最大のものである。

4. ニーレジハーザ(2) ギリシア・カトリック司教座聖堂とセミナリウム

ところで上記の研究院に通う間、イヴァンチョー教授のご厚意により、滞り場所として付設セミナリウムの来訪者用客室が提供された。セミナリウムには、1年次より6年次まで現在38名の神学生たちが起居を共にしている。筆者は、日々行われるビザンツ典礼の時課・聖体礼儀や共同での食事、土・日曜日に司教座聖堂にて行われる晩課と朝課、盛式聖体礼儀など、毎日のスケジュールを彼ら神学生たちと共にこなすことになった。この環境を通して、典礼を中心とした宇宙的時空間感覚を特徴とするビザンツ的世界観を、身をもって体験することができたのは、筆者にとって何物にも換えがたい収穫であった。



この間、筆者がハンガリー語で記した短報が小冊子に掲載された(“A névtelen zárándok...?” 「無名の巡礼者...?」, in: *Élet és Világosság: A Görög Katolikus Kisapok Lapja*, 2005. ősz, XVII. évfolyam 1. szám, 17-18, Nyregyháza 2005.11)。また12月2日には、上記研究院の教父学講座シヴァドー・チャバ教授の依頼により、ニーレジハーザ市内ヨーシャヴァーロシュ地区で行われた同教授の研究会にて、日本の教育事情をめぐりハンガリー語による講演を行う機会を得た(“A japán oktatás és a katolikus egyház”, Jóságosi Értelmiségi Egyesület, Nyregyháza, 2005.12.2)。

5. マーリアポーチ, 国際会議

さて、ハンガリーのギリシア・カトリック教会を語る際に、省くことのできない巡礼地がマーリアポーチ村である。同村はニーレジハーザから車で30分ほどの場所にあり、この村のギリシア・カトリック聖堂に掲げられた聖母イコンは、1696年、1715年、1905年の過去3度にわたり落涙している。2005年は、この最後の奇跡から数えてちょうど100年目に当たり、ハンガリーのギリシア・カトリック教会は、2005年に数々の盛大な催しを展開した。



まず10月1日から4日間、同村で「欧州マリア聖地ネットワーク」の国際会議が開かれた。これは、欧州各地に点在する聖母ゆかりの巡礼地が連携し、テーマを決めて随時シンポジウムを行う企画であり、2005年はマーリアポーチが開催地となった。それまで地中海沿岸域をはじめとする15都市がメンバーであった同ネットワークには、本年新たにマリヤ・ピストリツァ（クロアチア）、レヴォチャ（スロヴァキア）、チークショムヨー（ルーマニア）、ジブラルタルの4都市が加えられた。同村の聖母イコン、および「聖地ネット」に関して、詳しくは滞在中に執筆した拙稿「聖母の涙—地中海を越えて—」(「地中海学会月報」284,p.6,2005.11 <http://wwwsoc.nii.ac.jp/mediterr/geppo/284.html>)を参照。これは改変を伴って本書第3章「補説」に再録された。

また11月の21・22両日には、同村にて「マーリアポーチの恩寵イコン第三次落涙100周年国際シンポジウム」が開催され、これに出席した。同国際会議はハンガリー語によるものであったが、1920年トリアノン条約以前の旧ハンガリー領（スロヴァキア、エルデーイ、カルパータルヤ等）からの参加者・関連講演も多数にのぼり、大変興味深かった。またブダペシュトのパーズマニ・ペーテル大学の教授で教会法学者のサボ・ペーテル氏、同人文部教授で著名な神学者のサボ・フェレンツ師らとも親しく歓談する機会を得た。

6. ハンガリー教父学協会

この在外研究期間中、上記アタナズ研究院のオロス・アタナズ教父学教授および上掲のシヴァドー・チャバ教授お二人の推薦により、ハンガリー教父学協会への入会が許可され、12月15日にブダペシュトにて開かれた同協会の会合に出席することができた。オロス・アタナズ教授は、著名な教父学者としてこの協会の有力メンバーの一人であるが、ビザンツ典礼の歴史的復元とそのプランに立脚した観想修道共同体活動を、スロヴァキアとの国境に近いダーモーツ村にて実践することでも知られる修道司祭である（このビザンツ典礼研究所には8月下旬に滞在した）。



「ハンガリー教父学協会」(Magyar Patrisztikai Társaság)は、ハンガリー国内の教父学および関連分野の研究者たちが、ほぼすべて名を連ね、その活動に参画する学会である(会員数現在約100名)。同協会は、年次大会を夏に中部のケチケメート市・ピアリスタ会学院で開催するほか、新刊書評会を随時ブダペシュトで、また冬には上述のニーレジハーザ聖アタナズ研究院で小大会を開いている。上掲ペーチ大学のショモシユ教授やハイドル教授、あるいはアタナズ研究院のイヴァンチョー博士らも会員である。彼ら会員の活動・新刊書目の紹介を兼ね、滞在中に準備した拙稿「ハンガリーにおける教父学研究」が、

わが国の中世哲学会学会誌『中世思想研究』第48号「研究動向」欄に掲載される予定である(2006年9月刊行予定)。

またこのブダペシュトでの書評会の際に、シャーギ・マリアンネ、アダミク・タマーシュ(以上 ELTE 大学)、バーン・イシュトヴァーン(ミシュコルツ大学)、ペシュティ・モニカ(アボル・ヴィルモシュ大学)、ヤーカブ・アティツラ博士など、ハンガリーを代表する多くの教父学研究者たちと交流を深めることができたのは大きな収穫であった。機会が許せば、今後同協会の大会においてハンガリー語により研究発表を行うことも視野に入れつつ、引き続き研鑽に励みたいと考える。

おわりに

ヨーロッパでは、わが国の大学等研究機関の沿革と異なり、人文科学諸分野に関しては教会組織に淵源を持つ研究施設が長い伝統を誇るとともに、研究領域によってはそちらに属する研究者が主流を占める場合も少なくない。筆者の関わる分野は、まさしくそのような場合に該当する。本企画の立案に際しては、そういった機構面での差異を乗り越え、何らかの形で欧日間の国際的な研究交流・連携を図ることができないだろうかという思いがあった。国立大学である筑波大学から、今回このような厚遇を得て在外研究を遂行できたことは、望外の幸いであり、感謝にたえない。今後日本の研究者が海外諸機関との交流を図る場合、このような機構面での差異をも十分に理解し、柔軟な姿勢で研究交流に臨むことが求められよう。真の意味での「国際連携」のあり方を模索する上で、半年間の体験は非常に有益であった。筑波大学関係各位の方々、およびハンガリーでお世話になった方々に、改めて御礼を申し上げたい。

— ・ — ・ —

補説 1

アクィンクム(ブダペシュト)について

アクィンクムは、ハンガリーの首都ブダペシュトの北部、オーブダ地域に残る古代ローマの遺跡である。軍用・市民用それぞれの円形劇場跡が残り(A.D.145年および162年頃に各々建設)、市民用劇場に近い市跡地区には考古学博物館がある。その門石の標識には、‘AQUINCUM polgárvárosának romterülete’ (アクィンクムの文民都市遺跡地区)と記されている。ハンガリー語はアジア系のウラル語族に属する。polgárvárosának の語尾 ~nak は「与格接尾辞」で、次に続く語彙に対する所有関係を表す。~nak の前の ~á は、この語彙がその前に置かれた AQUINCUM に属することを示す所有接尾辞である(長音化)。接尾辞は日本語の格助詞に似る。polgár は「文民」、város は「都市」、rom は「遺跡」、terület は「区域」で、その末尾に付された ~e は上記の ~á と同様、所有接尾辞であるが、‘a’/‘e」と音が異なっているのは「母音調和」による。そしてこの「母音調和」とは、古代日本語を含め、トルコ語やフィン語など、アジア系の諸言語に共通する現象なのである。



現在のブダペシュトは、東岸のペシュト、西岸のブダおよびオーブダの三都市が1873年に合併してできた東欧有数の大都市であるが、このあたりはローマ時代、ドナウ川の南・西にかけて広がる属州パンノニアに含まれていた。パンノニアは、A.D.50年前後に属州イ

リュリクムの北部が分立して属州とされたことに遡源する。ドミティアヌス帝の頃(81-96)にはここに基地が置かれて第 II 軍団 *Adiutrix* の駐屯地となり、トラヤヌス帝(98-117)治下(106)には、パンノニアが上部・下部に二分割されたことに伴い、アクィンクムは東部に位置する下部パンノニアの首都となる。初代の下部パンノニア総督としてここに滞在したのは、後のハドリアヌス帝である。さらに同帝(117-138)の初期、120 年には自由都市(municipium)アエリウムとして、またセウエルス帝(193-211)の下、194 年には植民市(colonia)セプティミアの名で、アクィンクムは文民都市としても発展を続ける。ディオクレティアヌス帝期(296)には、上下両属州が各々さらに分割され、アクィンクムはウァレリア州の首都とされる。しかし 4 世紀以降、パンノニアは蛮族の襲撃に晒されて疲弊し、379 年にはゴート族とフン族による破壊を受け、433 年には最終的にフン族の手に委ねられる。当地が現在のマジダル族による支配の下に置かれるのは、下って 9 世紀末のことである。欧州にある古代ローマの辺境地区が、現在ではアジア系言語圏に含まれることを知り、地中海文化圏の広がり思いを致して感慨を覚えるのは、おそらくわたくしだけではあるまい。

補説 2

国立セイチェーニイ図書館をめぐる断想

現在、ハンガリーの首都ブダペシュトのブダ城王宮 F 地区は、堂々たる威容を誇る国立セイチェーニイ図書館が占めている。同図書館がその名を冠するセイチェーニイ・フェレンツ伯(1754-1820)は、現ハンガリーの通貨のうち 5000 フォリント紙幣にもなっているセイチェーニイ・イシュトヴァーン伯(1791-1860)の父親に当たり、この図書館およびペシュト側にある国立博物館の創設者として名を遺す。ブダ城 F 地区の 8 階分を占める同図書館の入り口は、城郭南端の「獅子の中庭」に面し、ちょうど図書館内の 5 階部分に相当する。



18 世紀の末、セイチェーニイ伯は「ハンガリー的なもの」の総体を収集することを自らの目標として定めた。それは、ハンガリーが一貫してヨーロッパ的な知的共同体の有機的一員であることを立証するためであった。彼は自らのコレクション、すなわち 13000 冊の印刷本、1200 点の手写本、数百点の地図等を国家に寄贈する。こうして「国立セイチェーニイ図書館憲章」が 1802 年 11 月 25 日に起草され、翌日王から認可が下りた。図書館は当初ペシュト地区にあり、一般への開館は 1803 年 12 月 10 日に行われている。国立図書館の創設は当然、当時盛り上がりつつあった国民主義に大きな刺激を与えた。同時に、図書のみならず考古学的・歴史的遺産・芸術等をも収集しようという国立博物館設置の原動力ともなり、そのための法令は 1808 年に定められた。1846 年、図書館は博物館内に新しく開設された建物に移され、さらに 1985 年、現在のブダ城内の王宮地区に移転する。

現在この国立図書館が総力を挙げて取り組んでいるのが、15 世紀の後半、ハンガリー最盛期のマーチャーシュ・コルヴィヌス王(1443-90; 在位 1458/63~没年; 第 34 代国王)による蔵書、すなわち「コルヴィナ文庫」の再構築事業である。同文庫は、往時には 1500 から 2000 冊に及ぶ古典関係の貴重書を所蔵し「ヴァチカンに次ぐ」とも称された絢爛たる蔵書コレクションである。現在、欧米の図書館には残存する 232 点の所在が確認され、現ハンガリー国内では 54 点、そのうち 36 点がこの国立セイチェーニイ図書館に収められている(詳しくは本書第 7 章を参照)。このマーチャーシュ王は、在位中「義王」として誉

れも高かった名君であり、ユーロ導入までのハンガリー通貨 1000 フォリント紙幣にもなっている。「コルヴィナ文庫」のための基盤は、王が幼少の頃より受けたラテン語など人文主義的な文化教育であった。もっともこの図書館蔵書は、王の死後、南から攻勢を強めたトルコ軍が 1526 年モハーチの戦いの余勢を買って北進しブダを攻略した際、その多くがドナウ川に散った。



さて、現在のブダの地に最初に王宮を建てたのは第 19 代国王ベラ IV 世 (1206/35-70) である。彼は 1241 年タタール人の襲来に遭い、北方のエステルゴムからブダに王宮を移すことを企図した。続いて 14 世紀には第 26 代国王ナジ・ラヨシュ (1326/42-82)

によってブダ城の増改築が行われ、15 世紀にはマーチャーシュ王がここに人文主義の栄華を花開かせることになる。一方、初期に王都であったエステルゴムは、現ハンガリー領内では北のスロヴァキアとの国境、やはりドナウ河畔に位置する。当地は現在に至るまでハンガリー・カトリック教会の総本山であり、大聖堂はまさしく圧巻である。同聖堂の建立は 1821 年から 1869 年にかけて行われており、これは上記セイチェーニ図書館と同じく、ハンガリー史のなかで「改革期」(1825-1848) と呼ばれる近代化の時期に当たる。大聖堂の前身は 11 世紀、初代国王聖イシュトヴァーン (967-1038) が建てた聖堂に遡り、その当時は王城もエステルゴムにあった。このエステルゴム大聖堂は、イシュトヴァーンの像とともに現 10000 フォリント紙幣にも印刷され、初代国王と当地との密接な関係を想起させる。ちなみに上記「コルヴィナ文庫」の蔵書は、ハンガリー国内では国立図書館のほかに、学士院やエトヴェシュ・ローラント大学の図書館、それにジュールの司教座図書館にもその所在が確認されているが、エステルゴムの大司教座図書館も同文庫の 1 つを所蔵する (Inc.I,1; Raynerus de Pisis, *Pantheologia*) 。

ハンガリーの図書館史を語る際、西部のジュール近郊にあるパンノンハルマ修道院も重要な位置を占める。同地を訪れる者は、修道院内部をアーケード状に取り囲むマーチャーシュ王時代の回廊と、古典様式による図書室を参観することになる。図書室は修道士、教師、研究者、学生たちによって利用され、総蔵書数は 365000 冊にのぼり、さらに年間 2000-3000 冊ずつ増加しているという。蔵書は主として神学関係のものであるが、ハンガリーとヨーロッパの歴史・文学関係のものも含まれる。稀覯本としては、13 世紀から 17 世紀にかけての手写本 20 点、200 点におよぶ incunabula (1500 年以前の印刷本) を所蔵し、最古の蔵書は 13 世紀に遡るラテン語聖書である。世界遺産にも指定されている同修道院は、ベネディクト会に属し、後期ロマネスク / 初期ゴシック様式の大聖堂を擁する。同聖堂は中世ハンガリー建築に属する傑作の一つでもある。この修道院の起源は、聖イシュトヴァーン王の父ゲーザ公が、996 年チェコからやって来た修道士たちをパンノニアの聖なる山に住まわせたことに発する。1001 年にはイシュトヴァーンにより法的にも同修道院の特別な地位が認可され、存立の基礎が固められた。現在なお、ここには約 60 名のベネディクト会修道士が聖師父の戒律に従って共同生活を営み、Ora et labora (「祈り、働け」) の精神を伝えている。



「コルヴィナ文庫」をひもとき、ハンガリーの図書館史を遡るうちに、初代国王聖イシュトヴァーンの姿が次第に前景に現れてきた。おりしも毎年 8 月 20 日には、ハンガリー全

土で国を挙げて「聖イシュトヴァーンの祝日」が祝われる。彼の生涯を辿るとき、彼やマーチャーシュ王を含め、歴代の王が戴冠されまた埋葬された地として、セーケシュフェヘルヴァールも無視することはできない。ブダペシュトの西南、特急でちょうど1時間の地に位置するこの町は、中世のころから「アルバ・レギア」(白い王城)の名で知られ、ハンガリー国内でも有数の歴史を誇る町の一つに数えられる。往時の大聖堂はトルコの襲撃を受けて瓦解した



が、現在は「遺跡公園」として整備・開放され、発掘が継続されている。トルコがこの地を陥落させる1543年までの間、戴冠を受けたハンガリー国王は総計37名にのぼるが、この(旧)「慈愛の聖マリア大聖堂」には、聖イシュトヴァーンをはじめ、アールパード朝歴代の王たちの墓所があった。以下順に、文人王カールマーン(-1116)、ベーラII世(-1141)、ゲーザII世(-1162)、ラスローII世(-1163)、イシュトヴァーンIV世(-1165)、ベーラIII世(-1196)、ラスローIII世(-1205)と並ぶ。14世紀になると現200フォリント紙幣にもなっているカーロイ・ローベルト(-1342)、ナジ・ラヨシュ(-1382)、次いでアルベルト(-1439)、そしてマーチャーシュ王(-1490)、16世紀前半のウラスローII世(-1516)、上記モハーチの戦いで散った若き王ラヨシュII世(-1526)、それにサポヤイ・ヤーノシュ(-1540)まで、総計15人の王がここに埋葬されたとされる。

896年に建国(honfoglalás)を果たしたハンガリーでは、19世紀の末に建国1000年祭を祝うべく諸方面で準備が進められた。ドナウ川の東岸、ペシュトにある聖イシュトヴァーン大聖堂の建造事業もその一つである。この大聖堂の建立に際しては、1810年代に基礎事業が始められたが、工事はようやく1851年8月14日、ペシュトの有権市民で建築家のヒルド・ヨーゼフのプランにしたがって着手された。彼は上記エステルゴム大聖堂の設計者でもある。彼の死後総監督責任者が相次いで交代し、結局献堂式は1905年9月19日、アールパード家の聖エルジェーベトの記念日に行われた。この聖堂内の主祭壇をぐるりと取り囲むように、聖イシュトヴァーンによる5つの主要事跡が青銅レリーフによって掲げられているが(マイエル・エデの作)、そこには上記パンノンハルマ修道院の建立も含まれている。



19世紀の創設になる現ブダ城内の国立セイチェーニイ図書館から出発したわれわれの旅は、その秘宝である15世紀の栄華、マーチャーシュ王の「コルヴィナ文庫」を通して、11世紀聖イシュトヴァーンの時代へと遡ってきた。その間、エステルゴムの大司教座聖堂とパンノンハルマの大修道院を経由し、歴代の王の着座と埋葬の地、セーケシュフェヘルヴァールを経て、ペシュトの聖イシュトヴァーン大聖堂へと及んだ。総じて、図書館が施設としての整備を終え、利用に供されるようになったのはそれほど昔のことではない。だがそこに収められた蔵書の伝播を辿り、伝播の経緯をひも解き、あるいは建築史の上にその図書館を置いてみると、一国の歴史の背景が浮かび上がることも稀ではない。いま、ハンガリーの首都ブダペシュトにあって、ブダ城のセイチェーニイ図書館とペシュトの聖イシュトヴァーン大聖堂とは、かつてコルヴィナ文庫の多くを河底に沈めたドナウをはさみ、静かに対峙している。